

広報かがわ

第85号

編集発行
香川自治会
広報委員会
興印刷所

香川の人口
9,279人
男 4,664人
女 4,615人
香川の世帯数
2,710
(60.10.1現在)

「特集」おじやまします

おめでとーいづいづい

金婚式



久保英雄さん
ツルさん

(第一町内会)

お二人は昭和九年十一月十日、東京で結婚されました。ご主人は佐賀県、奥様は長崎県のご出身。生年月日は、ご主人が明治四十一年三月二十五日、奥様は大正十一年十一月十一日とのことです。ご主人は戦争中、中島飛行機に勤務していたために兵役免除となり、昭和二十年まで東京におられたそうです。戦後の混乱期には、郷里の佐賀県に帰られ、昭和四十一年に鎌倉に住み、香川には昭和五十一年から住んでおられます。長寿の秘訣をお伺いすると、「あまり辛いものを食べないようになっている。」とのことでした。今までの苦労についてお伺いしますと、「結婚して二十年くらい、母

西山治夫さん
キヨさん

(第一町内会)

去る十一月十日、香川二九〇番地に、西山治夫「明治四十一年八月一日生」キヨ「大正三年八月八日生」様御夫妻を訪問して、お話しを伺いました。昭和九年三月二十日に御結婚以来五十年「仲良くけんかしながら、時には旅行もしたり、此れが長生きの秘けつでしょう」、「子育てが終り、やれやれと思つたら五十年経つてましたよ」と笑いながら話されるお二人、床の間の高砂の置物のように和やかなムードでした。

西山さんは群馬県出身で、電気大学「昔は高専」を卒業後国鉄電気工務局に奉職、全国各地を転勤、鉄道の電化に尽力され、退職後も資格を生かし、各工場の電気設備



「追記」香川に越して来られたのは、昭和三十九年三月十五日、砂防の為に植えられた沢山の庭木の中の柿の実をお土産に頂戴しました。

「そのための、酒屋を続けることが出来た。家内も、子育てと重なり大変な時代でしたが、人情も厚かった時代でした。」昭和二十年四月に、ご主人は再召集を受け、九州の五島列島に配属となり、そこで終戦を迎えました。戦争中の生活についてお尋ねすると、ご主人は次のように言われ



松野雄三さん
セイさん

(第二町内会)

の保安管理業務に従事。現在も精力的に活躍して居られます。又、スポーツも万能でテニス、ゴルフ、スキー、スケート、登山、野球と何んでもござれ。特に登山は在学中から南アルプスへ良く出掛け、群馬、長野、山梨と此の辺の山はほとんど踏破。健康と体力作りに励んだ為、七十七才の今も姿勢が良く非常に若々しく感じました。奥様は謡曲とさつきの育成が御趣味で、四・五年前に大病をなされてからは、少し休んで居られるそうです。此の五十年間で一番の思い出と嬉しかった事は、と伺うと、御主人が昭和五十六年の天皇誕生日に皇居に招かれ勲五等瑞宝章をお受けになった時と、奥様の具合の悪い時御主人が大変良くしてくれた事。「まさかこのような人と思わなかった。本当に思いがけなかつた」と目をうるませて居られました。五人の御子様も立派に成人なされ、悠々自適の御二人が何時迄も仲良く長生きされる様にと祈りながら、失礼しました。

お二人の生年月日は、ご主人が明治四十一年九月二十九日、奥様は明治四十四年一月四日。結婚記念日は、昭和九年十月二十三日で、当時は大変不景気な時代だったそうです。横浜の新安の駅と国道との間で、酒屋さんの営んでいましたが、戦争中その附近の約二十戸ばかりが取り払い(強制疎開)となり、松野さんたちも、厚木、海老名へと移転。産業試験場に勤めるようになりました。

「孫たちを通して、学校のことなど考えますと、私たちの頃は全く違っているようです。私たちの頃は、全く自由がありませんでした。今はにぎやかに暮らしています。」
「孫たちを通して、学校のことなど考えますと、私たちの頃は全く違っているようです。私たちの頃は、全く自由がありませんでした。今はにぎやかに暮らしています。」

ました。「当時は夢中でしたが、今ではよく頑張ったものだと思います。酒屋は個人営業のため、大変でした。今の若い人たちは、理解できないかも知れませんが、親類や周囲の人たちの助けがあったからこそ、営業できたと思えます。当時小さかった子供たちも、現在、当時のことを思い出さずうです。」
「戦争体験と言いますと戦地の男たちの苦労話をよく聞きますが、私はいつも、家に残った家族たちの苦労を思います。終戦の頃は、私が四十才、家内は三十才ぐらいでした。」「子どもは男二人と女二人の四人です。長男は亡くなり、今はにぎやかに暮らしています。」
「孫たちを通して、学校のことなど考えますと、私たちの頃は全く違っているようです。私たちの頃は、全く自由がありませんでした。今はにぎやかに暮らしています。」

子孫に伝えよう

祖先の生活と知恵を!!

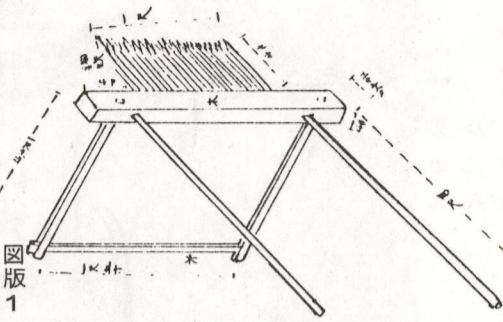
郷土民俗資料室設置への

ご協力とお願い

香川小学校長 丸井 浩

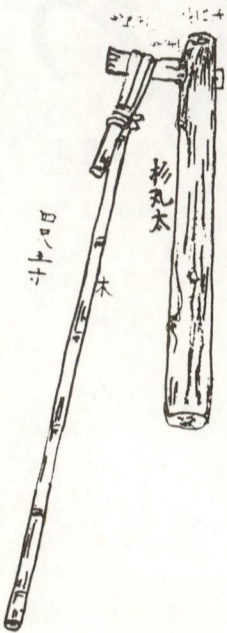
昨年の第四回文化祭は、会員のみなさんのご協力で、大盛況に終わることが出来ました。特に、第一青少年広場での「わら工芸」の実演や農機具の展示は、学校教育関係者にも「よい体験学習」と好評をいただきました。地域の香川小学校では、学習効果を高めるために、「郷土民俗資料室」の設置とその充実を計画しています。

そのために、みなさんのご協力をいただきたいと希望しています。過日、その主旨については回覧され、ご存知と思いますが、その内容について、更にくわしく香川小の丸井校長に書いていただきました。



図版1

図版1は通称「千歯」又は「千把こぎ」と呼ばれる脱穀用道具ですが、昭和の中頃迄使われて居りましたもので大変寿命が長い道具だったので、つまり元禄の頃(今からざつと三百年も昔)農業は、新田開発や道具の改良などによって農業生産が高まった時期ですが、この頃、この地に於いても、行商人の手によって新しい道具が普及されてきたと思われ、稲や麦の束をこの歯にひっかけて、実を落とすという簡単な道具ですが、それ迄の方法はとていまいすと



図版2

りや今に伝えられている行事や道具、四年生では水路の開発、五年生では伝統的な工業や農家の観察、六年生では身近な地域から歴史を学ぶなど「地域を」ではなく「地域で」学びとる姿勢が大切にされて居ります。例えば三年生の学習の場合、学習効果を高めるため、自分の目で捕えさせようとして見学学習を組むとしても、遠く小学校迄行かないと不可能であるし、海岸にある文化資料館なら完璧なのですが、こちらは一日掛りとなるのでこれは無理。

図版2は「くるり」又は「麦打棒」と呼ばれる地方によっては「唐さお」といわれる脱穀用道具の一種で千歯こぎと同様、長い間、農家で使われてきました。麦、粟、豆打ちとして、時には粟まきの準備として土砕きにも使われ、練習を要さないという容易さもあってか、老幼男女の労働に用いられて来ました。記録によると、壮男なら午後半日の四時間で、大麦や粟なら一俵半、大豆なら一俵、稲なら二時間で一俵を落す事が出来る。畑作農家一戸について三挺以上は所有して居り、一挺の値段三十銭とある。私は戦争中、学徒勤労動員で伊勢原の農家へ手伝いに行つた折、この道具で麦打ちをさせられたが、なかなかむずかしく、上方でクルッと回すタイミングがとれず苦しい思いだけが残っています。こうした道具自身も貴重で当時の人々が調子を合わせるのに歌われた労働歌の保存も大切なのです。現在南湖地域に保存されている「麦打ち唄」などがそれです。一人で黙々とバタ、バタと打ち落すのではなく、能率をあげるため、三人から五人位がかりで行うと、自然に唄が出て来るものです。私の幼い日、線路工場の「ヨイトマケ」や、地ならし掛声の唄など、よく耳にしたものです。

最近香川小でも、児童数が年々減少を見て居り、五十六年ピークであった四十三学級一八五三名から本年度は三十六学級一五〇三名となつてまいりました。そのため、教室に余裕が生じてきましたので、有効な利用の一方法として、「郷土民俗資料室—農漁具と生活民具や史資料の展示」のための設置がきまつたわけです。この資料室の充実には、香川小学校区にお住いのかたがたからの協力やご援助がないと、到底無理な事ですので、宣敷くお願いを申し上げる次第でご座居ます。こんなガラタがと思われ物置き片隅で眠っているものでも、分類して展示すれば立派に子ども達の教材に息吹く文化財も数多く御座居ます。幸い十一月に趣意書をお配りした所、十四、五名の方がたから申し出があり、有難く戴きました。ご寄附ばかりでなく、ご貸与でも宣敷しいので、「こんなもの」と一べつなされずに、ご一報下さい。今は水道でひねればジャーと便利な世の中ですが、水道普及前(約三十数年前)は、井戸から汲んで、「水桶」流し台のそばにある「水ガメ」に入れ、流し台の上には「洗いオケ」など種々なオケ類やザルが並んでいる様子が見られたのもそんな古い頃ではなかつたです。その一つ一つには、いろいろ



住みよい香川に

香川に越して来て、はや四年を迎えました。日頃感じていることは、夜道の不便さ、特に足元もおぼつかないほど暗い道路が多いことです。よく用事で出掛ける香川九三番地付近(第一町内会)のごぼこ道とその暗いこと。雨ががりの後に、水たまりに足をとられることもしばしばです。自治会の方で、ご検討をお願いしたいと思います。次に、最近よく見かける犬に関する立札です。我が家でも犬を飼つていますので、大変気にかかり同じ地域のみなさんに迷惑をかけるないようにと日頃心がけています。しかし、同じ犬を飼う方でも、野原や道路で、犬の糞の後始末もしないで、横目で見てもそのまま人もいます。そのマナーの悪さは、犬を飼う資格などないと思つています。もっとひどい飼いに

な思ひ出がこめられていたと存じます。そうした農具や民具を保存展示する事以上に大切なことは、祖先の方がたの生活の知恵の結晶である生活文化財を仲介として、子ども達と地域にお住まいの皆様がた(父母の皆様も)とのコミュニケーションが出来るれば幸いな事と思ひますし、物を大切に持つ心持ちや、ひいては郷土を愛する心の培いにも大切な一助になると確信して居ります。くどくなりませんが、宣敷くご協力の程をお願い致します。

茅花俳句会

- 初春の日のあたりいる小松原 沓沢 みや
- 元日や小熊のような雲の出で 人去りてどどのの海鳴りす 藤村 球子
- 舞初めの扇を落す屠蘇機嫌 初夢の歩きつかれて覚めにけり 夫と付つアロエの丘や旅初め 山雀の胸にふくらみ万年青の実 山畑に陽のやさしかり北風 翔つたびの鳥を光らせ冬の川 長島 久江
- 交替の守衛の窓辺初明 みじろがぬ鯉を見てをりふところ手 泣く話笑ふ話や女正月 熊沢 幸一
- 年来る笹の雫に触れてみる 日向ほこ腕の置場に心持つ 手袋の握手の指の細きかな 平塚 司郎
- 初髪之母をしのげる背丈かな 水らざるところ漣かがよへる 犬抱いて銀行に居る師走かな

おねがい

各サークルの活動状況をお知らせください。活動内容、活動日時費用、指導者など原稿用紙(四〇〇字)一枚ぐらいでおねがいます。また、地域の出来事や会員の声など広報委員まで、お寄せください。(広報委員会)